て居る。殊に結句の「男とぞ思ふ」には、強い信頼が現れ、聲調も亦莊重であつて、一首の内容に千鈞の重みを添へた感じがする。なほ此の歌の音調が極めて莊重雄壯に響くのは、勇健な感を伴なふオの母音と、鋭い響のカ行音とタ行音が、多く用ゐられてゐる爲である。

天皇賜三酒節度使卿等一御歌一首幷短歌

九七三　食す國の　遠の朝廷に　汝等が　かく罷りなば　平らけく　吾は遊ばむ　手抱
食國　遠乃御朝庭爾　汝等之　如是退去者　平久　吾者將遊　手抱

きて　我はいまさむ　天皇朕が　うづの御手もち　搔き撫でぞ　勞ぎ給ふ　打
而　我者將御在　天皇朕　宇頭乃御手以　搔撫曾　爾宜賜　打

ち撫でぞ　勞ぎ給ふ　還り來む日　相飲まむ酒ぞ　此の豐御酒は
撫曾　爾宜賜　將還來日　相飲酒曾　此豐御酒者

【釋】○天皇賜三酒節度使卿等一　「天皇」は聖武天皇を申す。「節度使卿等」は、前に掲げた續日本紀天平四年八月丁亥の記事に見えてゐる、藤原房前・多治比縣守・藤原宇合等である。○食す國の　「食す」は知ろしめす意。（既出）朕が統治してゐる國の。○遠の朝廷に　僻遠の地にある官廳の意で、鎭守府や太宰府等を指す。〔三〇四〕參照。○汝等が　流布本の訓にナレカ、考にナムヂタチガ、略解にナムヂラガ、古義にイマシラシと訓んで居るが、童蒙抄にイマシラガと訓んだのが穩かである。目下の者を指す古代の第二人稱の代名詞には、「な」「なれ」「いまし」「みまし」等があつて、「なむぢ」は未だ用ゐられてゐない。又「みまし」の用例も宣命にあるだけで、萬葉には見當らない。○かく罷りなば　「退去者」を流布本にイテテシユケハ、代匠記精撰本にマカリシユケハ、童蒙抄にイデユカバ、考にマカリナバと訓んである。今は考の訓に從ふ。○平らけく　「平らけし」の連用形。心安らかにの意。○手抱きて　「手抱而」を流布本にタニキリテと訓んでゐるのは妥當でない。古義には日本靈異記に「抱手田支」とあるのを證としてテウダキテと訓み、「うだく」は腕纏の約言であると解いて居る。又新考にはタウダキテと訓んである。（新訓・新解・新釋・全釋同訓）然し代匠記に指摘して居る通り、日本書紀には「抱」にムダカヘテの訓を施し、又春日政治氏が指摘せられた通り、天長五年點の『成實論』には「抱」にムタカハル・ムダカムの訓が施してあり、『八十卷華嚴經音義』（奈良朝書寫）に「卒太久」とあり、本集の東歌にも「かき武太伎寢れども飽かぬ」（三四〇四）の例があるから、「抱く」を奈良朝時代にはムダクと言つた事が判る。よつて代匠記の訓（童蒙抄・考・略解・攷證同訓）に從つてタムダキテと訓むべきである。「むだく」が平安朝になつて「うだく」「いだく」となり、更に後世「だく」となつたのである。（『萬葉學論纂』及び『國語國文』第五卷第二號所載春日氏論文參照）さて「たむだきて」は手を拱いて・腕組みをしての意で、なす事もなく平安無事に日を送るのを云ふ。○天皇朕が　流布本の訓にキミノワカとあるが、代匠記の訓に從つてスメラワガと訓むべきである。天皇なる朕がの意。「すめら」を天皇の意に用ゐた例には集中に「須米良御軍」（四三七〇）「隱さはぬ赤き心を須賣良弖爾」（四四六五）又祝詞に「皇良我朝廷乎」等がある。○うづの御手もち　「うづ」は神代紀の訓註に「珍、此云二于圖一」とあり、『玉篇』に「珍、貴也美也重也」とあるから、珍貴又は尊嚴の意を表す名詞である。「うづの御手」は神代紀の「稜威之雄誥」「稜威之道別道別而」などと同じ云ひ方で、體言に「の」を添へて形容詞的修飾語としたのであつて、貴い御手の意である。これと同類の例は祝詞に「宇

豆能弊帛乎」「皇我宇都御子」などがある。最後の「以」を流布本にモテと訓んで居るが、古義の訓モチに從ふべきである。さて天皇が御自ら「我はいまさむ」「うづの御手」と仰せられ、又下にも「勞ぎ給ふ」とあるやうに敬語法を用ゐて居られるのは、神聖にして侵すべからざる至尊の御位に在つて、仰せられる御言葉であるからである。此の慣例に就いては既に述べて置いた。○搔き撫でぞ　「搔き」は「打ち撫で」の「打ち」と共に接頭語。「ぞ」は係助詞。愛撫し給ふ意で、愛しみ憐み給ふことの具象的表現である。文武天皇御即位の時の宣命にも、「天下乃公民乎惠賜比撫賜牟止奈母、隨レ神所思行佐久止詔云々」とある。○勞ぎ給ふ　「ねぐ」は「ねぎらふ」と同義で慰勞する意。○還り來む日　考にカヘリコムヒニ、略解にカヘラムヒと訓んで居るが、流布本の訓にカヘリコムヒとあるのがよい。○相飲まむ酒ぞ　流布本の訓にアヒノマムサケソとあるが、略解にアヒノマムキゾと訓み改めたのが妥當である。「酒」を古く「き」とも言つた事は、之に接頭語を添へて「美伎奉る」(四二六三)「此の美岐は吾が美岐ならず」(古事記)と云つた例があるので明かである。今此所に賜ふ此の酒は、任を卒へて無事に還り來る日に、又相共に飲む酒であるぞといふ意。○此の豐御酒は　「豐御酒」の假名書の用例には「登與美岐獻らせ」(古事記)がある。「豐」は美稱の接頭語。(既出)

【譯】朕が治めてゐる國土の遠き境にある政廳に、汝等がかうして赴くならば、朕は心を安んじて遊んでゐよう、手を拱いて暮らさう。大君なる朕が貴き御手をさし延べて、かき撫でうち撫でて其の勞苦をいたはるぞ。今賜ふ此の御酒は、汝等が任を終つて無事に還り來る日に、重ねて共々に酌むべき酒であるぞ。

【評】節度使に對する篤き御信任と御仁慈が、一句一句に溢れて居り、格調も莊重雄大であつて、奈良朝の最盛時代に君臨し給うた大帝の玉音を拜するやうである。殊に雄健な終の三句には、彼等を激勵し且平安を祈らせ給ふ大御心が現れてゐて、かしこき限りである。

反歌一首

九七四　丈夫の　行くとふ道ぞ　おほろかに　思ひて行くな　丈夫の伴
大夫之　去　跡云道曾　凡　可爾　念　而行　勿　大夫之伴

右御歌者或云太上天皇御製也

【釋】○行くとふ道ぞ　訓は考に從つた。流布本にユクトイフ、童蒙抄にユクチフとある。「道」は古事記傳に、或目的を以て行く事を云ふのであつて、漢文に「此行」などいふ「行」の字義に當ると解いて居る通りである。なほ新考に初の二句を「大丈夫ならでは果し難しといふ任ぞ」と解いてある。「とふ」は「と云ふ」の意。○おほろかに　假名書の例に「於保呂可爾すな」(一四五六)がある。「疎かに」の原形であつて、おろそかになほざりに疎略に等の意を表す副詞である。(二一一七)參照。○丈夫の伴　節度使等を指す。「伴」はともがら(輩)の意。○太上天皇　元正天皇である。

【譯】丈夫たる者にして始めて赴くべき重任であるぞ。おろそかに思つて行くな、丈夫だちよ。

【評】初句と結尾句に「丈夫」を繰返してある爲に、彼等を激勵し且自覺を促し給ふ御心が、極めて效果的に表現せられて居る。なほ格調が二句目と四句目で切れて居り、又一首の上に母音のオが頻りに響くので、自ら莊重雄渾な感が起る。さて節度使等は親しく盛宴を賜はり、剩へかゝる御製をさへ賜はつたのであるから、定めし聖恩に

感泣し勇躍して、其の任に就いた事と思はれる。吾々も此の御製を拜誦して、今更ながら、義は卽ち君臣にして、情は猶父子の如き、萬邦無比の君臣關係に、感激せざるを得ないのである。

山上臣憶良沈レ痾之時歌一首

九七八　男やも　空しかるべき　萬代に　語り續ぐべき　名は立てずして
士也母　空　應　有　萬代爾　語　續　可　名者不　立之而

右一首山上憶良臣沈レ痾之時、藤原朝臣八束使ニ河邊朝臣東人一令レ問ニ所レ疾之狀一。於レ是憶良臣報語已畢有レ須拭レ涕悲嘆口吟此歌一。

【釋】○男やも　原文の「士也母」を代匠記にヲノコヤモ又はマスラヤモ、攷證にヲトコヤモと訓んで居るが、ヲノコヤモと訓むべきである。「や」は反語、「も」は感動の助詞。○空しかるべき　流布本の訓にムナシカルヘシとあるが、上の「や」に對する結であるから、代匠記にムナシカルベキと訓んだのが正しい。空しく朽ち果てるべきであらうか。○名は立てずして　流布本の訓にナハタタスシテとあるが、古義の訓に從つてナハタテズシテと他動詞にして訓む。○藤原朝臣八束　「八束」は眞楯卿の先名。房前の第三子で、天平寶字年間に太宰帥・中納言兼信部卿などに任ぜられ、神龜二年に大納言で薨じた。歌は集中に短歌八首傳はつてゐる。○河邊朝臣東人　寶龜元年に石見國守となつた人。集中に短歌一首を傳へてゐる。

【譯】萬代の後までも語り傳へてくれるやうな、立派な名を立てずして、男子たるものが空しく朽ち果ててなるものか。

【評】左註によれば、天平五年に憶良が重病の牀に臥してゐた頃、藤原八束が河邊東人を遣はして見舞はせた際に詠んだ歌である。恐らくこれが彼の辭世の作となつたであらう。現實に執著してゐた氣概に富んだ憶良は、重病に呻吟しながら自分の一生を振返つて見て、世人を驚かすやうな業績も無く死なねばならぬ事を腑甲斐なく思ひ、又肉體の滅んだ後に殘る我が名の、餘りに貧弱なのを想うて、死んでも死にきれないやうな思ひがしたのである。憶良が欲したやうな名は殘らなかつたが、歌人として不朽の名が傳はつた事を思ふと、吾々も感慨の念に堪へない。さて憶良に私淑した家持は、此の歌に和して「丈夫は名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人も語りつぐがね」(四一六五)の一首を詠んでゐる。

大伴坂上郎女與下姪家持從ニ佐保一還歸西宅上歌一首

九七九　吾が背子が　著る衣薄し　佐保風は　いたくな吹きそ　家に至るまで
吾　背子我　著　衣薄　佐保風者　疾　莫　吹　及　家　左右

【釋】○姪　ヲヒと訓む。「姪」は我が國では「めひ」卽ち兄弟の生んだ女子を指すのであるが、『玉篇』に「昆弟子之稱」とあるから、支那では甥姪を總稱したのである。家持は坂上郎女の義兄に當る旅人の子で、此の時十六歲である。○西宅　所在は明かでない。○著る衣薄し　流布本にキタルキヌウスシ、童蒙抄にキルキヌウスシ、略解にケルキヌウスシ、攷證にケセルキヌウスシと訓んである。略解の訓が妥當である。「著る」の用例には「此の吾が家流妹が衣の垢づく見れば」(三六六七)「吾が祁流襲の上に」(熱田神宮緣起)等がある。「ける」を新解に「きる」と同じで、下一段活用動詞であるとし、全釋に「きる」の古語であるとされたのは共に妥當でない。「ける」は「きる」

（著）の連用形「き」に、助動詞「り」の連體形が附いたので、「著たる」と同じく、著てゐるの意である。（上代には未だ下一段活用動詞は無かつた。）○佐保風は　佐保の里を吹く風。前に「明日香風」の用例があつた。

【譯】吾が君が著て居る著物は如何にも薄い。さぞ寒からうから、佐保を吹く風はひどく吹くなよ、家に歸り著くまでは。

【評】女性らしい濃かな思遣りの溢れた歌である。坂上郎女は、やがて自分の娘の坂上大嬢を、家持に嫁がせようと考へてゐたのであるから、家持に對する愛情は殊に深かつたものと思はれる。

安倍朝臣蟲麻呂月歌一首

九八〇　雨隱（あまごも）り　三笠の山を　高みかも　月の出で來ぬ　夜は更（くだ）ちつつ
雨隱　三笠乃山乎　高御香裳　月乃不出來　夜者更降管

【釋】○安倍朝臣蟲麻呂　天平九年に皇后宮亮、同十年に中務少輔、同十三年に播磨守、天平勝寶元年に伊豫守に任ぜられ、同四年三月中務大輔で卒した。集中に短歌五首を傳へてゐる。○雨隱り　雨に降られて隱れる笠といふ意味で「三笠」に冠した枕詞。三笠山は春日山の西の一峰。〔一三二〕參照。○高みかも　「か」は疑問の係助詞。高いからであらうか。○夜は更ちつつ　流布本にヨハフケニツツ、略解にヨハクダチツツと訓んでゐる。「ふけにつつ」でも差支ないが、「夜具多知（クダチ）に寢覺めて居れば」（四一四六）「夜降而鳴（クダチ）く河千鳥」（四一四七）などの例があるから、今はクダチツツと訓んで置く。「くだつ」は「くだる」（降）と同系統の語で、時が經過すること。夜はずんずん更けての意。

【譯】あの三笠山が高い爲であらうか、夜は段々と更けて行くのに、月がなかなか出て來ず、待ち遠いことである。

【評】春日山の麓に在る作者が、山の上に月の出て來るのを待ちわびて詠んだ歌である。此の歌の次にある、坂上郎女の作「獵高（かりたか）の高圓山を高みかも出で來る月の遲く光（て）るらむ」（九八一）とあるのも著想の類似した作である。

大伴坂上郎女月歌二首（○原三首の中）

九八二　ぬば玉の　夜霧の立ちて　おぼほしく　照れる月夜（つくよ）の　見れば悲しさ
烏玉乃　夜霧　立　而　不　清　照有　月夜乃　見　者悲　沙

【釋】○ぬば玉の　「夜」の枕詞。○おぼほしく　「不清」を流布本にスマサルニ、童蒙抄にオホロニモと訓んで居るが、考にオボホシクと訓んだのが穩かである。分明でなく、朧ろげに朦朧との意。〔一八九〕參照。○照れる月夜（ゆ）　「照れる」は「照る」に助動詞の「り」の連體形が附いた形。照つてゐるの意。○見れば悲しさ　「悲しさ」は「悲し」の語幹に、接尾語の「さ」が附いて名詞となつたもので、ここは悲しさよの意。類例には前に「音のさやけさ」（三一四）「術も術なさ」（七九六）等があつた。「悲しさ」の主語は上の「月夜」であるから、「見れば」は一首の初に置き換へて解くべきである。

【譯】見ると夜霧が一面に立ち籠めて、朧ろに照つてゐるあの月の光の悲しさよ。

【評】薄絹のやうな霞や霧を透して、朦朧と照る月の光を仰ぐ者は、誰しも心細げな悲しげな感情に引入れられるであらう。此の歌は斯かる特殊な月夜に於ける微妙な情調を、何の苦心もなく無雜作に言ひ棄てた所に、限りない味が涌き起るのであつて、作者の勝れた自然觀照と、作歌の技倆とを窺ふことが出來る。

九八三　山の端の　ささらえ壯子　天の原　門渡る光　見らくし好しも
山葉　左佐良榎壯子　天原　門度光　見良久之好藻

右一首歌或云、月別名曰二佐散良衣壯士一也、緣二此辭一作二此歌一

【釋】○山の端の　山のはづれ即ち山の頂と空との界をいふ。「山之葉にいさよふ月の出でむかと」（一〇〇八）の用例がある。○ささらえ壯子　左註にある通り月の異名である。「ささら」は「ささら荻」（三四四六）「ささら形」（允恭天皇紀）「さされ石」（三五四二）「さされ波」（三〇一二）等の「ささら」「さされ」と同じ。即ち「ささ」は「ささやか」「ささやく」「いささか」等の語根で、細小轉じて愛すべき意を表す。「ら」は音調の爲に添へた接尾語。「え壯子」は神代紀の「可愛少男」と同じで、「え」は「よし」（善・好）の古語の「えし」の語幹である。「え」を愛すべき者の意に用ゐた例には、「かつがつも最先立てる延をしまかむ」（神武天皇記）がある。さて「ささらえ壯子」は可愛い好い男の意で、月を擬人して賞でた稱である。同類の月の異名に「月讀壯子」（一三七二）「月人壯子」（二二三三）などがある。○門渡る光　「門」は「瀬門」「水門」「島門」などの如く門戸の義である。（既出）「門渡る」は「淡路島とわたる船の」（三八九四）のやうに、通例海峽を渡る意に用ゐるが、此の歌では大空を海原になぞらへて、月が東から西へ渡るのを云ふ。○見らくし好しも　見る事のよろしさの意。「見らく」は見ること。「し」は強意の助詞。

【譯】山の端から出て來た可愛いお月樣が、大空を渡つて行く光を眺めてゐるのは、まことに快いものである。

【評】月を愛する情を詠んだ歌は數多くあるが、此の歌は懷かしみの情を含んだ「ささらえ壯子」といふ語によつて異彩を放つてゐる。内容はとり立てて云ふ程の事もないが、何となく若々しい女性の作らしく感じられる。

湯原王月歌一首（○原二首の中）

九八五　天に坐す　月讀壯子　幣はせむ　今夜の長さ　五百夜繼ぎこそ
天爾座　月讀壯子　幣者將爲　今夜乃長者　五百夜繼　許增

【釋】○湯原王　〔三七五〕參照。○月讀壯子　月の神の「月讀命」（古事記）「月弓尊」「月夜見尊」（書紀一書）などに基づく月の異名である。「つくよみ」の語義には諸説があるが、未だ從ふべき説を見ない。試みに自分の考を述べれば、月夜見の義で月夜を主宰する神の義か、或は「月夜」は單に月その物を指し、「見」は身の義で、顯身の神の觀念を表してゐるのであらうと思ふ。（書紀のツクユミは言ふまでもなくツクヨミの轉訛である。）○幣はせむ　〔九〇五〕參照。○今夜の長さ　原文の「長者」の「者」は攷證の説の通り、漢文の助字に倣つて添へた文字である。其の例には「苦者」（一〇〇七）「遙者」（一五五〇）「樂者」（一七五三）などがある。○五百夜繼ぎこそ　五百夜を續ける程に長く照つて欲しいといふ意。「こそ」は願望を表す。〔八五二〕參照。

【譯】天に坐します月讀命よ、お禮は差上げませうから、どうか月のよい今晩の長さを、五百夜も續けて戴きたいものです。

【評】前の歌には可憐な少女らしい感情が詠まれてゐるが、此の作は想も調も男性的で、恰好の對照をなしてゐる。

市原王宴禱二父安貴王一歌一首

九八八　春草は　後はうつろふ　巖なす　常磐に坐せ　貴き吾が君
春草者　後波落　易　巖成　常磐爾座　貴　吾　君

【釋】○市原王　安貴王の御子で、天平十五年に從五位下を授けられ、天平寶字七年に攝津太夫、續いて造東大寺長官となられた方である。短歌八首が集中に收められてゐる。○禱　『玉篇』に「求」禱也」とある。茲は長壽を祈る意。○安貴王　〔三〇六〕に出づ。○後はうつろふ　原文の「落易」を流布本にカレヤスシ、代匠記精撰本にチリヤスシ、略解にウツロフと訓んで居る。代匠記の訓が廣く行はれてゐるが、「易」に變の義があるから、今は義訓によつてウツロフと訓んで置く。用例に「梅の花雪に萎れて宇都呂波むかも」（四二八二）「咲く花も時に宇都呂布」（四二一四）等がある。「移ろふ」は「移る」に助動詞の「ふ」が附いたので、次第に衰へ凋む意。○巖なす　原文の「巖」は流布本に「嚴」とあるが、西本願寺本等に據つて改めた。巖の如くの意。新解には流布本の「嚴成」を「嚴來」に改め、類聚古集等の古訓によつてイツクシクと訓んである。○常磐に坐せ　「磐」は類聚古集等諸本に據る。永久不變に坐しませ。○貴き吾が君　流布本にカシコキワカキミ、代匠記精撰本にタフトキアカキミ、考にタフトキワギミと訓んで居る。これはタフトキワガキミと訓むべきである。〔三七七〕參照。

【譯】若々しい春の草葉は、秋になれば枯れ凋んでしまひます。それとは反對に、どうか巖のやうに、いついつまでも永遠に變らずに坐しませ、我が貴い父君よ。

【評】勅撰集の賀の歌に見るやうな、型にはまつた概念的な作とは異なつて、眞情の溢れた調の力强い歌である。

大伴宿禰家持初月歌一首

九九四　振りさけて　三日月見れば　一目見し　人の眉引　思ほゆるかも
振仰而　若月見者　一目見之　人之眉引　所念可聞

【釋】○初月　歌に「若月」と記してあるのと同じで、月初の新月卽ち三日月をいふ。○振りさけて　流布本の訓に據る。元暦校本等の訓にフリアフキテとある。眼を遠方に放つて。○人の眉引　「まゆ」（眉）を古くは「まよ」と云つた。〔五六二〕參照。「眉引」は引眉のことで、眉毛を抜いて其の跡に黛で描いた蛾眉を云ふ。古事記の歌謠に「三栗のその中つ土を、頭著く眞日には當てず、眉畫き濃に畫き垂れ」とあるから、青黑い土を黛に用ゐた事が判る。引眉は支那の風俗に倣つたのである。

【譯】大空を振り仰いで三日月を眺めると、ただ一目逢つたあの女の美しい引眉の形が、懷かしく思ひ出されてならない。

【評】空に懸つてゐる三日月の姿は、見る人によつて異なれる詩的空想を描かせるものである。此の作者は一目見て强く印象に殘つた、女の蛾眉を想ひ浮べてなつかしんでゐるのであつて、構想が優美艶麗である。此の歌は天平五年家持が十六歳の時の作で、年代の明記せられた彼の歌では最も古い。さて原本には此の歌の前に、「坂上郎女初月歌一首」と題する「月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く戀ひし君に逢へるかも」（九九三）がある。吉澤博士は此の二首の關係に就いて――「振りさけて」の作は「月立ちて」に和したものであるが、家持は恐らく坂上の里に閑居してゐた叔母を訪ねたのであらう。「一目見し人の眉引」といふところに、はじめて若い大嬢を見た心が現れてゐる。さう考へると郎女の歌も、大嬢に代つて詠じたものと見るのが妥當である。この作を技巧から見て後年のものと推定する人もあるが、彼の環境から見て、この位の修辭には十分習熟してゐたことがわかると思ふ。――と述べて居られるのは傾聽すべき說である。（『萬葉集講座』作者研究篇所收「大伴家持」參照）

六年甲戌海犬養宿禰岡麻呂應レ詔歌一首

九九六　御民吾　生ける驗あり　天地の　榮ゆる時に　遇へらく思へば
御民吾　生有　驗在　天地之　榮　時爾　相　樂　念　者

【釋】○六年　天平六年。○海犬養岡麻呂　傳未詳。○御民吾　流布本にミタカラノワカ、考にオホタカラワレと訓んでゐるが、前記の代匠記精撰本の訓がよい。天皇の臣民たる我はの意。○遇へらく思へば　流布本にアフラクオモヘハと訓んでゐるが、略解の訓アヘラクオモヘバに從ふべきである。「遇へらく」は「遇ふ」に完了の助動詞の「り」を添へた「遇へり」に、用言を體言化する接尾語の「く」を附けたのであつて、遇つた事をの意。

【譯】大君の御民である自分は、誠に生き甲斐がある。天地の榮ゆる盛大な御代に生れあはせた事を思ふと。

【評】天平の極盛時代を頌讃した有名な歌である。「御民吾」は無限の皇恩に浴する自己を明かに意識した者の言葉であり、「生ける驗あり」は聖代に生を享けた者の滿足と感激の聲である。而して「天地の榮ゆる時に」の句には、大陸の文化を盛に攝取し、國威を海外に伸展した、國民の氣宇が籠つてゐるやうに思はれる。

春三月幸二于難波宮一之時歌二首（○原六首の中）

九九八　眉の如　雲居に見ゆる　阿波の山　かけて榜ぐ舟　泊知らずも
如　眉　雲居爾所　見　阿波乃山　懸而榜　舟　泊不　知毛

右一首船王作

【釋】○春三月云々　續日本紀聖武天皇の天平六年の條に「三月辛未、行二幸難波宮一。（中略）戊寅車駕發レ自二難波一、宿二竹原井頓宮一。庚辰車駕還レ宮。」と記されてゐる時の事である。○眉の如　「眉」を流布本にマユと訓んでゐるのはよくない。遠島の景色を眉に譬へたのは漢文の影響である。仲哀天皇紀八年の條に「愈二茲國一而有二寶國一、譬如二美女之睩一有二向津國一云々」とあるのも其の一例である。○雲居に見ゆる　遙か彼方の空に見える。○阿波の山　阿波國の連山を指す。○かけて榜ぐ舟　「かけて」の意味を代匠記に目にかけての義とし、攷證に心にかけての意として居るのは、共に明瞭を缺いてゐる。童蒙抄に「かけて」は向ふに一つの目標を定めて事をする意であつて、「ここよりかしこにかけて」「春より夏へかけて」「宵より曉にかけて」のやうに、此處と彼所と二つにかかつてゐる事を云ふのである、と解いて居るのは當を得てゐる。此所は阿波國の山の方を目指しての意。○泊知らずも　何處に碇泊する積りであらうか、其の行方が知れない。○船王　フナノオホキミと訓む。舍人親王の御子で、天武天皇の御孫、淳仁天皇の御兄に當る。續日本紀によると、神龜四年に從四位下を授けられ、天平十八年に彈正尹となり、天平寶字三年に三品を授けられ、同四年に信部卿となり、同六年に二品を授けられ、同八年に仲麻呂の謀反に坐して隱岐國に流された方である。集中に短歌三首が傳はつて居る。

【譯】眉を引いたやうに、遙かの彼方の空に見える阿波の山を目指して、漕いで行くあの舟は、一體何處に碇泊するのであらうか、行方も分らず心細い感じがする。

【評】紀淡海峽の遠き彼方に見える、淡墨を引いたやうな阿波の山と、模糊とした沖合に浮ぶ扁舟とが、細々とした頼りなさを感じさせる。作者はかゝる景中の孤舟に自己の旅愁を託して、此の歌を詠んだのであつて、自然と情感の融合から成れる詩境は、高市黑人の「何所にか船泊てすらむ安禮の崎漕ぎ廻み行きし棚無小舟」（五八）と相

似てゐる。

一〇〇一　丈夫は　御獵に立たし　處女等は　赤裳裾引く　清き濱邊を
丈夫者　御獵爾立　之　未通女等者　赤裳須素引　清　濱備乎

右一首山部宿禰赤人作

【釋】○御獵に立たし　天皇の催し給ふ獵であるから「御獵」と云つたのである。「立たし」の「し」は例の敬語の助動詞。大宮人(丈夫)に對する敬語である。○赤裳裾引く　流布本の訓にアカモスソヒキとあるが、類聚古集の訓にアカモスソヒクとあるのがよい。

【譯】丈夫たちは御獵のお伴をして出で立たれ、官女たちは清い濱邊を、赤い裳の裾を曳いて樂しく遊んでゐる。

【評】行幸に扈從してゐる男女の大宮人の、華かな行樂の樣を對照的に描き出してゐる。美しい彩色畫を見るやうな鮮かな光景ではあるが、描寫が平面的であるのは、赤人の歌風が動もすれば陷り易い缺點である。

桜作村主益人歌一首

一〇〇四　思ほえず　來ましし君を　佐保川の　河蝦聞かせず　還しつるかも
不所念　來座　君乎　佐保川乃　河蝦不令聞　還都流香聞

右内匠寮大屬桜作村主益人、聊設二飲饌一、以饗二長官佐爲王一。未レ及二日斜一、王既還歸。於レ時益人怜二惜不レ厭之歸一、仍作二此歌一。

【釋】○桜作村主益人　「村主」はスクリと訓む。姓の名である。「すくり」の語原に就いては、韓語の「すき(村)にりむ(主)」の轉訛であらうと云ひ、又「すき(村)おり(主人)」の轉約であらうとも云ふ。「村主」は縣主に屬し、戸口租調の事を掌る職で、多くは歸化人に賜うた姓である。益人の傳は未詳。○思ほえず　攷證にオモハヌニと訓んでゐるが、文字の上からは、流布本や諸註に從つて、オモホエズと訓むのが穩かである。思はれず、卽ち思ひも掛けずの意。○來ましし君を　流布本の訓にキマセルキミヲとあるが、新考にキマシシキミヲと改めたのが妥當である。最後の「を」は格助詞の役目を兼ねた感動助詞。○河蝦聞かせず　「不令聞」を流布本にキカセデと訓んであるが、「で」の用例は上代には無いから、攷證にキカセズと改めたのが正しい。○還しつるかも　訓は代匠記精撰本に據る。流布本にカヘリツルカモとある。○内匠寮大屬　「内匠寮」はウチノタクミノツカサと訓む。内匠寮の職員は、續日本紀の神龜五年の條に「八月甲午、是日勅始置二内匠寮一、頭一人・助一人・大允一人・少允二人・大屬一人・少屬二人・史生八人・使部已下雜色匠手各有レ數。」とある。「大屬」は從八位上の微官である。○長官　内匠寮の頭であらう。○佐爲王　續日本紀に據れば、和銅七年に從五位下を授けられ、養老五年退朝の後東宮に侍せしめられ、天平九年八月に中宮大夫兼右兵衞率正四位下で薨じた。〔一〇〇九〕參照。

【譯】思ひがけもなく珍らしくお出で下さつたのに、佐保川で鳴くあの好い河蝦の聲もお聞かせしないで、お歸し申したのが心殘りでございます。

【評】佐爲王が作者の家を辭去したのは、夕日の照る頃であつたが、やがて夜に入ると、近くの川瀨で河蝦が鳴き頻つたので、翌朝此の一首を詠んで贈つたのである。上流階級に於ける社交的な贈答歌の一例である。

市原王悲二獨子一歌一首

一〇〇七　言問はぬ木すら妹と兄ありとふをただ獨子にあるが苦しさ
不言問木尙妹與兄有云乎直獨子爾有之苦者

【釋】○市原王云々　市原王は安貴王の御子。（九八八）參照。市原王に御兄弟がなく、獨子であることを悲しまれた歌である。代匠記・童蒙抄・古義等に、市原王が只獨子を有つて居られたのを悲しまれた作であると見たのは誤である。○言問はぬ　物を言はぬ。○木すら妹と兄　「妹と兄」は「妹背」即ち夫婦の事にもなるが、ここは兄弟姉妹を云ふ。○ありとふを　訓は略解に據る。流布本にアリトイフヲ、古義にアリチフヲとある。ありと云ふをの意。○あるが苦しさ　只獨子であるのが苦しいことよの意。「苦しさ」は（九八一）の「悲しさ」と同じ語形。

【譯】口の利けない木でさへ兄弟があるといふのに、自分はたつた獨子に生れたのが悲しくつらい。

【評】先に講じた「春草は後はうつろふ云々」（九八八）と此の歌とを併せ讀むと、市原王は家庭的には淋しい方であつた事が判る。

冬十一月左大辨葛城王等賜二姓橘氏一之時御製歌一首

一〇〇九　橘は實さへ花さへ其の葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹
橘者實左倍花左倍其葉左倍枝爾霜雖降益常葉之樹

右冬十一月九日、從三位葛城王、從四位上佐爲王等、辭二皇族之高名一、賜二外家之橘姓一已訖。於レ時太上天皇皇后共在二于皇后宮一、以爲二肆宴一而卽御二製賀レ橘之歌一、并賜二御酒宿禰等一也。或云此歌一首、太上天皇御歌。但天皇皇后御歌各有二一首一者、其歌遺落未レ得二探求一焉。今撿二案内一、八年十一月九日、葛城王等願二橘宿禰之姓一上レ表、以二十七日一依二表乞一賜二橘宿禰一。

【釋】○冬十一月　天平八年十一月。○左大辨　「辨」は元暦校本に據る。流布本に「臣」とある。○葛城王　續日本紀に據つて其の御傳を記すならば、葛城王は敏達天皇の玄孫美努王（三野王とも記す）の御子で、和銅三年從五位下を授けられ、天平元年左大辨、同三年參議に擢んでられ、同八年十一月同母弟佐爲王と共に上表して臣籍に降り、母の縣犬養橘三千代の姓に倣つて、橘宿禰の姓を賜はり、名を諸兄と改めた。（左註參照）其の後天平九年に大納言、翌年に右大臣、十五年に左大臣を拜し、十八年に太宰帥を兼ね、天平勝寶元年に朝臣の姓を賜はり、同八年に致仕し、天平寶字元年に薨じた。歌は集中に短歌八首が傳はつてゐる。縣犬養橘三千代は始め美努王に嫁し、元明天皇の和銅元年に姓橘宿禰を賜はり、後不比等に嫁して光明皇后を生み奉つた夫人である。○御製歌　聖武天皇の御製である。尤も左註には、太上天皇卽ち元正天皇の御製であると傳へられてゐる。○橘は　橘は上代では外來の珍果として尊重せられた。記紀に之を「非時香菓」と稱し、垂仁天皇朝に田道間守を常世國に遣はして求めしめ給うた傳說が見えてゐる。橘は元來外來植物であつて、朝鮮の濟洲島若しくは南支那方面から移植されたのであらうと言はれてゐる。○其の葉さへ　此の句の下には、めでたい上にといふ意の語を補つて解くべきである。○枝に霜降れど　流布本の訓にエタニシモオケト、古義の訓にエニシモフレドとあるが、今は考に從つてエダニシモフレドと訓む。○いや常葉の樹　流

美努王
- 葛城王（橘諸兄）
- 佐爲王（橘佐爲）

縣犬養橘三千代
- 光明皇后
- 藤原不比等
- 聖武天皇（四五）
- 孝謙天皇（四六）

布本の訓にマシトキハノキ、代匠記にマシトコハノキ、童蒙抄にイヤトキハノキ、略解にイヤトコハノキと訓んで居る。略解の訓が妥當である。「常葉」の「とこ」は常の義で(既出)、「常葉の樹」は葉が常に綠で變らない樹卽ち常綠樹を云ふ。○太上天皇　元正天皇を指し奉る。○皇后　光明皇后。○肆宴　トヨノアカリと訓む。後世「豐明」の字を當てる。「肆」は展ぶ列ぬの義である。『詩經』の大雅篇に「肆レ筵設レ席」と用ゐてある。○案內　「案」は記錄文書を云ふ。

【譯】橘は實も花も、又其の葉までもめでたい上に、枝に霜が降つても、彌とこしへに葉の榮える樹であるぞ。

【評】橘の氏を賜ふに當つて、橘にあやかつて行末永く繁榮するやうにと、祝福して詠ませられた御製である。橘は常磐木である上に、前年に熟した果實を持ちながら花の咲く特異性があるから、實と花と葉を一々擧げさせられたのである。此の列擧法は「さへ」の反復と共に、橘の觀念を强調し、音調に莊重な響を與へる效果がある。結句の「いや常葉の樹」は素朴にして雄大な表現法で御製に相應しい。因みに續日本紀天平八年十一月丙戌の條に載する、葛城王及び佐爲王の上表中に、姓橘宿禰を賜はつた次第が明記せられてゐるから、左に揭げて置く。

葛城親母、賜從一位縣犬養橘宿禰、上歷二淨御原朝庭一、下逮二藤原大宮一、事レ君致レ命、移レ孝爲レ忠、夙夜忘レ勞、累代竭レ力。和銅元年十一月廿一日、供二奉擧レ國大嘗一、廿五日御宴、天皇譽二忠誠之至一、賜二浮杯之橘一、勅曰、橘者果子之長上、人所レ好、柯凌二霜雪一而繁茂、葉經二寒暑一而不レ凋、與二珠玉一共競レ光、交二金銀一以逾美。是以汝姓者賜二橘宿禰一也。而今无二繼嗣者一、恐失二明詔一云々。

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首

一〇一八　白珠は　人に知らえず　知らずとも　吾し知れらば　知らず
白珠者　人爾不　所知　不　知友　縱　雖　不　知　吾之知有　者　不　知
ともよし
友　任意

右一首或云、元興寺之僧獨覺多レ智、未レ有二顯聞一。衆諸狎侮。因レ此僧作二此歌一、自嘆二身才一也。

【釋】○十年　天平十年。○元興寺　此の寺は平城七大寺の一で、崇峻天皇の元年に、蘇我馬子が高市郡飛鳥村眞神原に興し、佛法興隆の意を以て法興寺(後元興寺と稱す)と號した寺で、推古天皇の四年に竣功した。然るに和銅三年に平城遷都があり、諸大寺も新都に移轉したので、養老二年に此の寺を平城京の左京五條七坊(今の猿澤池の南方の芝新屋町)に移建し、天平十七年に完成したのである。然し飛鳥の地は佛敎興隆の舊地であるから、移轉後更に此處に再建して、之を新京の新元興寺に對して本元興寺と云つたのが、今纒かに存してゐる安居院(飛鳥大佛とも云ふ)である。新京の新元興寺は四町四方の境域を占め、池を隔てて北の興福寺と對峙して勢力を競うた寺である。○白珠は　「白珠」は眞珠で、ここは自分を譬へたのである。○人に知らえず　訓は略解に據る。流布本にヒトニシラレスとある。○狎侮　「狎」は原文に「押」とあるが、代匠記精撰本の說に從つて改めた。馴れ侮ること。

【譯】ここに立派な白珠があるのだが、其の價値は人に認められてゐない。よし人は知らなくてもかまはない。人は知らなくても、自分さへ其の眞價を知つて居れば、人は知つてくれなくてもよいのだ。

【評】此の歌は五・七・七・五・七・七の旋頭歌形式を以て、己の學才が世に認められず人に尊敬されないのを、私かに歎いて歌つたものである。『論語』學而篇の「人不レ知而不レ慍、不二亦君子一乎。」や「不レ患二人之不二己知一。患レ不レ知レ人也。」と略同じ内容を詠んだもので、教養を積み學德を具へた高僧の強い自信と氣概が窺はれる。なほ技巧としては、各句に同音のシラを反復して韻を踏み、又「知らえず」「知らず」「知れらば」の如く同語を頻りに繰返して居るのが、さほど作爲的に響かずして、寧ろ獨り慰め且諦めて獨語するが如き口吻を有效に表してゐる。

同月十一日登二活道岡一集二一株松下一飲歌一首（〇原二首の中）

一〇四二　一つ松　幾代か經ぬる　吹く風の　聲の清めるは　年深みかも
一松　幾代可歴　流吹風乃　聲之清者　年深香聞

右一首市原王作

【釋】〇同月十一日　天平十六年甲申春正月。〇活道岡　山城國相樂郡西和束村大字白栖に在る岡で、聖武天皇の皇子安積親王の御墓がある。（八一五頁地圖參照）當時の都であつた恭仁京（後に詳述す）から布當川（今の和束川）に沿うて、東北へ一里半程溯つた處に在る。〇飲歌　ウタゲセルウタと訓む。宴席の歌である。〇一つ松　題詞に「一株松」とあるのを指す。〇聲の清めるは　新考にコヱノキヨキハと訓んであるが、一般には流布本の訓コヱノスメルハが行はれてゐる。〇年深みかも　流布本の訓にトシフカキカモとあるが、考にトシフカミカモと改めたのがよい。「か」は疑問の助詞。久しい年月を經てゐるからであらうかの意。〇市原王　既出。

【譯】此の一本松はどの位の年數を經たものであらうか。松を訪れる風の音が澄み切つて聞えるのは、年を久しく經てゐるためであらうか。

【評】岡の上の物古りた孤松の下に集うて、酒盃を傾けながら、松の梢を訪れる颯々たる風の音に聞き入つて詠んだ、如何にも高雅な作である。「幾代か經ぬる」と云ひ「年深みかも」と歌つて、老松である事を直接言葉に表してゐない爲に、却つてさながら風の音に耳を傾けてゐるやうに感じられる。自然の囁きに全精神を傾注した自然觀照の一態度を見るべき作である。

傷二惜寧樂京荒墟一作歌一首（〇原三首の中）　作者不レ審

一〇四五　世の中を　常無きものと　今ぞ知る　平城の京師の　移ろふ見れば
世間乎　常無物跡　今曾知　平城京師之　移徙見者

【釋】〇寧樂京荒墟　寧樂京が荒墟となつたのは、天平十二年から同十七年まで約五箇年間である。卽ち天平十二年九月藤原氏と橘氏との權力軋轢の結果、藤原廣嗣が太宰府に擧兵したので、天皇は橘諸兄の奏請により東國に行幸になり、やがて諸兄の取計らひによつて、同年十二月に山城の相樂郡恭仁に行幸になつて、そこを都と定め給うた。其の後難波宮を定めて遷都の議も起つたが、天平十七年五月に再び平城京に還幸になつた。〇移ろふ見れば　「移ろふ」（「移る」に繼續の意を表す助動詞の「ふ」の附いたもの）は荒廢に歸して行くのを云ふ。

【譯】此の世の中は凡て無常である事を、今始めて明かに知る事が出來た。あれ程榮えてゐた奈良の都が、次第に荒れ果てて行くのを見て。

【評】小野老が「咲く花の匂ふが如く今さかりなり」（三二八）と歌つた殷賑を極めた奈良の都が、恭仁遷都の爲に一

朝にして舊都となつて、日に日に荒れすさんで行くのを見ては、無常觀を起さずには居られなかつたであらう。

悲二寧樂故郷一作歌一首幷短歌

一〇四七　やすみしし　吾が大君の　高敷かす　大和の國は　皇祖の　神の御代より　敷きませる　國にしあれば　生れまさむ　御子の繼ぎ繼ぎ　天の下　知らしいませと　八百萬　千年をかねて　定めけむ　平城の京師は　かぎろひの　春にしなれば　春日山　御笠の野邊に　櫻花　木のくれ隱り　貌鳥は　間なくしば鳴く　露霜の　秋さり來れば　射駒山　飛火が岡に　萩の枝を　しがらみ散らし　妻呼び響む　山見れば　山も見が欲し　里見れば　里も住みよし　ものの　ふの　八十伴の緒の　うち延へて　里並め敷けば　天地の　依り會ひの限り　萬世に　榮え行かむと　思ひにし　大宮すらを　恃めりし　平城の京を　朝立ち行けば　さす竹の　大宮人の　蹈みならし　通ひし道は　馬も行かず　人も往かねば　荒れにけるかも

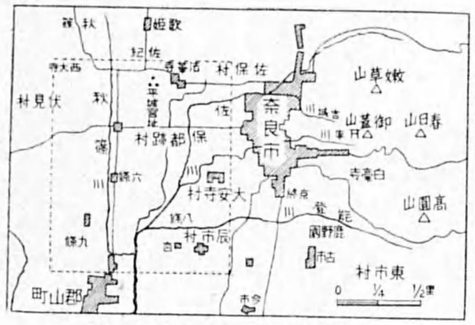
【釋】○悲二寧樂故郷一　流布本に「故京郷」とあるが、「京」は元暦校本等には無いから之を省いた。「寧樂故郷」は前に「寧樂京荒墟」とあつたのと同じく、恭仁京へ遷都の後、一時平城京が廢都となつた間を云ふ。○田邊福麻呂　以下講ずる歌の作者に就いては、此の巻の最後の左註に「右二十一首田邊福麻呂之歌集中出也」とあるから、〔一〇四七〕から〔一〇六七〕までが福麻呂歌集から採られた歌である事は明瞭である。福麻呂歌集は現在傳はつてゐないが、これから採られた歌は、巻六に二十一首（長歌六首短歌十五首）、巻九に十首（長歌四首短歌六首）ある。此等の作品は共通の特性を有つて居り、又本集の巻十八に收めてある福麻呂の作歌十三首（何れも短歌）との間にも共通性が認められるから、福麻呂歌集の歌は總て福麻呂の自作であると見てよい。福麻呂の傳は不明であるが、巻十八の巻頭の歌の題詞に「天平二十年春三月二十三日、左大臣橘家之使者造酒司令史田邊史福麻呂、饗二于守大

伴宿禰家持館に云々」とあるから、當時造酒司の令史といふ微官で宮仕をし、越中守家持の許へ使した事が判る。其の作風は概して赤人の敍景歌に似て平明且明朗であるが、一面には情熱的な表現力を缺く憾があつて、家持と共に萬葉末期の歌風の傾向を代表してゐる。○高敷かす　流布本の訓にタカシキシ、童蒙抄の訓にタカシケルとあるが、代匠記精撰本にタカシカスと訓んだのがよい。「高敷く」は「高知る」「太敷く」等と同義で、統治し給ふ又は宮居し給ふこと。最後の「す」は敬語の助動詞。○皇祖の　ここは皇祖の神で、神武天皇を指し奉つてゐる。(既出)○生れまさむ　此の世に現れ出で給ふ意で、降誕し給ふことを云ふ。(一一九)参照。○御子の繼ぎ繼ぎ　御子が相繼いで。○知らしいませと　流布本にシラシメマセト、考にシラシマサムト、古義にシロシメサムト、新考にシロシイマストと訓んであるが、代匠記精撰本の訓に從つた。天下に君臨し給へとの意。○八百萬千年をかねて　幾千萬年の行末をかけて。○かぎろひの　陽炎の燃ゆる春の義で下の「春」に懸けた枕詞。○御笠の野邊に　御笠山の麓なる野邊。即ち春日野である。御笠山は春日山の一部で、春日神社の背後に聳えてゐる。○櫻花木のくれ隱り　「木のくれ」は木の闇の義で、樹木の枝葉が小暗く繁つた所を云ふ。「櫻花木の闇茂に」(二五七)と略同じ意味で、櫻の花が木の小暗く茂つてゐる間に、咲き匂うてゐるのを云ふ。「くれ」の下に助詞の「に」を補ひ、句の終に「咲き」を補つて見ると意味がよく通じる。此處の「櫻花木のくれ隱り」と「貌

高圓山（右）　春日山（後方）　御笠山（前方）

鳥は間なくしば鳴く」とは對句である。○貌鳥は　「かほ鳥」は「容鳥」(三七二)「呆鳥」(一八二三)「可保等利」(三九七三)等とも記してある。如何なる鳥を指すかに就いては古來諸説がある。(イ)仙覺抄にはかほかほと鳴く鳥であると云ひ、(ロ)代匠記には「貌鳥」は「容花」の類で、春の色美しき鳥の稱とし、(ハ)考別記には「鳴くこゑ、ものをよぶに似たればよぶこ鳥といひ、又其こゑかほう〳〵と聞ゆれば集には容鳥ともよみたり」と言つて、閑古鳥即ち喚子鳥であるとし、(ニ)檜嬬手にも「かほ」は「かつこう」の轉音で、喚子鳥即ち郭公であるとしてゐる。(此の外小野博は鶯鶯とし、伴信友は翡翠であると云ひ、曾古春は雉子の雄とし、豐田八十代氏は鷸科の川鳥であるとされて居る。)思ふにこれは彌富破摩雄氏の説に從つて、郭公の一名とすべきであらう。即ち彌富氏は――「貌鳥」はカホ〳〵と鳴く鳴聲から命名した稱呼で、同じ鳥の鳴聲をクワンコウと聞いて「喚子鳥」と命名し、又カツポと聞いて「かつぽ鳥」と命名し、クワツコウと聞いて「郭公」と命名したのであつて、此等は皆同じ鳥の聲の擬聲音から出た名稱である。――と云つて居られる。(『萬葉集纒攷』所收「郭公杜鵑攷」参照)郭公は今も「閑子鳥」「かつぽう鳥」等と呼ばれてゐる鳥で、杜鵑に似てそれより大きいが、古くから兩者は屢混同されてゐる。○露霜の　「露霜」は霜になりかけの露。(既出)露霜の置く秋の意で「秋」に冠した枕詞である。○射駒山　流布本に「射鉤山」とあるが、「鉤」は元暦校本・類聚古集等に「駒」とあるのに據つて改めた。大和國生駒郡生駒町の西南方に聳ゆる生駒山(高さ六四〇米)で、大和と河内の國境に跨つてゐる。○飛火が岡に　流布本に「飛火賀塊丹」とあるが、「塊」は元暦校本に據つて「鬼」に改め、考の訓に從つてヲカと訓むべきである。「飛火」は和名抄に「烽燧(度布比)邊有レ警則擧之。」とある。山や岡等の上に設けたもので、外寇内亂などに際して、晝ならば煙を擧げ、夜ならば火炬を放つて

合圖とし、次々に急を傳へて行く設備である。軍防令に「凡置レ烽皆相去四十里、若有ニ山崗隔絶、須ニ遂レ便安置一者、但使レ得ニ相照見一、不ニ必要限ニ四十里一。凡烽、晝夜分レ時候望、若須レ放レ烽者、晝放レ烟夜放レ火、其烟盡ニ一刻一火盡ニ一炬一(中略)凡火炬、乾草作レ心、草上用ニ乾草一節縛、縛處周廻挿ニ肥松明一云々。凡放レ烟貯備者、須下收ニ艾藁生柴等一、相和放ち烟云々。」と規定されてゐる。さて「飛火が岡」は烽火を擧げる山岡である。續日本紀和銅五年正月の條に「壬辰、廢ニ河内國高安烽一、始置ニ高見烽及大倭國春日烽一、以通ニ平城一也。」とある。此の歌に謂ふのは此の高見山の烽である。高見山は生駒郡南生駒村から中河内郡枚岡村へ通ずる暗越の北に在る山で、



平城京址附近現圖

生駒山の南の一峰である。代匠記に此の「飛火が岡」を、古今集の「春日野の飛火の野守出でて見よ」に據つて春日の烽とし、「射駒山」も春日野の烽を立てる山であらうと云ひ、又古義にも「飛火」を春日の烽と見て、其の山を鹿野園の東、高圓山の東南に當る鉢伏峠である、と云つてゐるのは共に誤である。生駒山は今は奈良市街を西に三里餘りも距たつて居るが、上古の平城京からは二里程であるから、平城京の東の春日山に對して此の山を歌つたのは當然である。○しがらみ散らし　「しがらむ」は、木の枝等を押し撓めて絡ませるのを云ふ。〔一九四〕參照。鹿が萩の茂みに立ち入つて、枝を押し分けて行く時、啖き誇れる花をはら〳〵と散らすのを云ふ。○妻呼び響む　新考の訓に據る。流布本に「令動」をトヨメ、元暦校本にトヨミと訓んである。妻を呼んで鳴き騷ぐ意。○山も見が欲し　〔三二四〕に解いた。○里見れば　「里」に諸義があるが、ここは人里卽ち人の多く住んでゐる所を云ふ。行政區劃の「里」(靈龜元年に「郷」と改む)は郡に屬し、書紀孝德天皇の白雉二年四月の條に「凡五十戸爲レ里、每レ里長一人云々」と規定されてゐる。○もののふの　「八十伴の緒」の枕詞。(既出)○八十伴の緒の　「八十」は數多の意。「伴の緒」は或官職に從事する部屬の首長をいふ。〔九七一〕の「伴の部」參照。氏族制度が嚴格に行はれた頃には、氏長が中心となり、其の氏の部屬を率ゐて朝廷に仕へたのである。○うち延へて　「うち」は接頭語。「延ふ」は延ばす意の下二段活用動詞。「うち延へて」は引き續いての意で、時間的に繼續すること。用例に「打延而思ひし小野は」(三二七二)「うちはへて年のを長く戀ひやわたらん」(古今秦四)「雨のうちはへ降る頃」(枕草子)等がある。○里並め敷けば　流布本に「思並敷者」とあるのは穩かでない。「思」は童蒙抄に「里」と改めたのに從ふべきである。童蒙抄以下諸註にサトナミシケバと訓んで居る。「並み」は四段活用の自動詞の「並む」の連用形であるが、ここは里を並べ敷く意であるから、從來の訓は妥當でない。並べる意の他動詞は「並む」で、「友名目て遊ばむものを馬名目て往かまし里を」(九四八)の如く、マ行下二段に活用したのであるから、ここもそれに倣つてサトナメシケバと訓むべきである。「敷く」は地を占める意。人里を並べ構へたので。○天地の依り會ひの限り　「依會限」を流布本にヨリアハムカキリ、考にヨリアフキハミ、略解にヨリアヒノキハミと訓んであるが、今は代匠記精撰本の訓に從つてヨリアヒノカギリと訓む。此の二句は〔一六七〕で解釋した通り、天地のあらん限り未來永遠にの意。○思ひにし　訓は流布本に據つた。元暦校本・細井本の訓にオモヒイリシとあり、代匠記精撰本に思ひ入りしの意かと述べて居る。なほ新解にはオモヘリシと訓んである。

○大宮すらを　大宮さへもの意。終の「を」は感動助詞。下の「奈良の京を」の「を」も同じ助詞。○新世の　古義の訓に據つてアラタヨノと訓む。流布本にアタラヨノとある。「新世」は〔五〇〕に解いた。此の二句は立派な盛な御代の事であるからの意。古義に新た新たに移り變る世間の習はしであるから、と云ふやうに解いたのは妥當でない。○引きのまにまに　「引き」は率ゐて行く意。天皇が率ゐて行かれるままに。○春花の「遷ろひ變り」の枕詞。美しい春の花もやがて移ろふ意味で冠したのである。○遷ろひ變り　考の訓に據る。流布本の訓にウツロヒヤスクとあるのは妥當でない。新京へ移轉すること。○群鳥の　「朝立つ」の枕詞。「鳥じもの」を「朝立つ」の枕詞に用ゐるのと同じ類で、塒にゐる鳥が朝になつて巣を飛び立つ意で冠したのである。○朝立ち行けば　「朝」は「群鳥の」の關係で添へたので、人々が平城を立ち去る意である。○さす竹の　「大宮」の枕詞。此の外「君」「皇子」「舍人」等にも懸る。語義に就いては諸説があるが、多くは附會説であつて首肯し難い。それらの中で稍穩當と思はれるのは、谷川士清の倭訓栞の説である。卽ち「さす竹」は儀式帳に「五百枝刺竹田の園」とあるから、枝葉のさし茂つた竹のことで、「さす竹の」は「君」「皇子」などの長壽を竹に譬へて壽いだのであらうと云ふ。此の説は「さす」を、「五百枝さし」(三二四)「瑞枝さし」(九〇七)等の「さす」と同じに見たのである。なほ支那の故事に「竹園」を天子の子孫の意に用ゐる事も、此の枕詞の語義を考へる上に參考となるであらう。○蹈みならし　蹈みつけて地を平らにすること。蹈み鳴らす意ではない。人々が繁く行き通ふ事を云ふ。○通ひし道は　平城の都大路を指す。攷證に平城京から恭仁京へ通ふ道と見てゐるのは誤である。

【譯】我が大君が宮居し給へる大和の國は、皇祖の神の御代以來宮居遊ばされてゐる國であるから、お生れ遊ばす御子が、代々相繼いで天下に君臨し給ふやうにと、幾百萬年の後までかけて、都とお定めになつた奈良の都は、春になると春日山や御笠山の麓の野邊に、櫻の花が小暗い木蔭に隱れて咲き、郭公は間斷なく鳴き頻る。又秋がやつて來ると、生駒山の飛火が岡に、萩の枝を押し撓め花を散らして、牡鹿が妻を呼んで鳴く聲が響き渡る。山を眺めれば、山の景色も面白くして見飽く事がなく、人里を見ると里も住みよい所である。文武百官の人々が、永らくの間うち續いて人家を並べ構へたので、天地の續く限り萬代の後までも、榮え行くであらうと思つてゐた大宮であるのに、あれほど頼みにしてゐた奈良の都を、盛大な現代の事であるから、大君が率ゐて行かれるままに、次第に新京をさして遷り行き、奈良を立ち去つて行くので、今まで大宮人が繁く行き通うて蹈み平らした都大路は、今は馬も通らず人も通はなくなつて、すつかり荒れ果ててしまつたことである。

【評】恭仁京遷都は既に述べたやうに、藤橘二氏の勢力爭ひが因となり廣嗣の擧兵を機として、諸兄の奏請によつて實現したのである。而も遷都の議は急激に決定した爲に、宮城を始め都城の造營も不完全であり、工事は日を經ても進捗しなかつた。殊に平城京は三十年來の都で隆盛を極めた所であるから、新都に移る事を躊躇する者が多かつたのは當然である。續日本紀によると、天平十三年閏三月十五日に、平城京の留守大野東人藤原豐成等に詔して、自今五位以上の者は勝手に舊都に住む事を許さず、又現在舊都に在る者は直ちに新京に移れと嚴命せられた。然し未練のある者が多く、容易に引移らなかつたのであつて、此の作者もやはり、舊都に對する愛著に堪へなかつた一人であつたと思はれる。さて此の長歌の冒頭には、平城京奠都が永久の都としての一大抱負の下に行はれた事を敍べて、後に荒廢に對する感慨を歌ふ爲の前提として居る。次いで舊都に對する愛著の情を、平城

京の周圍の情景を中心に敍べ、更に殷賑を極めた樣を歌つて、最後にさしもの帝都も遷都の後は、忽ち荒廢して人馬の往來さへ絶えて、今日の悲しい姿となつた事を歌つて居る。構想が整然として居り、平城京裏の景勝に對する讃美と、荒都となつた現狀を歎く作者の感慨も、力は弱いが相當によく現れて居る。同じやうな題材で歌つた、人麻呂赤人等の作に學んだ痕が歴々として居るけれども、とにかく福麻呂の代表的な作品である。

反歌二首

一〇四八　立ちかはり　古き都と　なりぬれば　道のしば草　長く生ひにけり
立易　古京跡成　道之志婆草　長生爾異梨

【釋】○立ちかはり　「立ち」は接頭語。今までとはうち變つての意。攷證に、都の地が奈良から恭仁へ引き變る意と解き、古義に、帝都が建ち替る意と見たのは共に穩當でない。○道のしば草　「しば」は繁葉の義。「しば草」は雜草を云ふ。

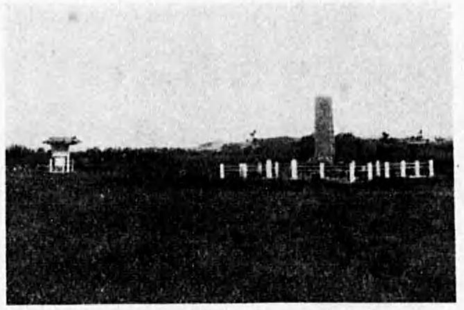
【譯】これまで榮えてゐた都が、うち變つて今は舊都となつたので、路傍の雜草が長く伸びて荒れ果てたことだ。

一〇四九　なつきにし　奈良の都の　荒れ行けば　出で立つ毎に　嘆きしまさる
名付西　奈良乃京之　荒行者　出立毎爾　嘆思益

【釋】○なつきにし　流布本の訓にナツケニシとあるが、拾穗抄にナツキニシと訓んだのがよい。「なつく」は馴れ著くの義で、ここは住み馴れて懷かしく感ずる意。「なつかし」は此の「なつく」から轉成した形容詞である。○出で立つ毎に　外に出で立つて眺める度に。○嘆きしまさる　流布本の訓にナケキシマスモとあるが、考にナケキシマサルと改めたのがよい。「し」は强意の助詞。

【譯】永らく住み馴れた奈良の都が次第に荒れて行くので、外に立ち出て眺める度に歎きが益して來る。

【評】奈良の市街を西へ一條街道(舊一條大路)を二十五町許り行くと、田の中に小高い芝地がある。それが平城宮の大極殿の址であつて、附近にはなほ龍尾道の跡や、十二堂・朝集堂・小安殿等の遺跡が散在し、瓦の破片が散らばり、掘りかへされた礎石の址などもあつて、見るからに懷古の情に堪へざるものがある。近く北に連なる佐保・佐紀の丘陵を背にして、大極殿址に立つと、東に綠色濃き春日山や若草の色淺き三笠山等一帶の山々が、東大寺の屋根や興福寺の塔の聳ゆる奈良市街の背景を形作り、遠く南に走つてなだらかな姿の三輪山に至つて盡きてゐる。更に眼を西に轉ずると、矢田の丘陵が長く延びて、其の背後に生駒山が著しく聳え、これも遠く南方に延びて葛城金剛の峻嶺に連なつてゐる。此の三面の連山で圍まれた廣漠たる平野が、卽ち平城京の舊跡であつて、東西二三里の幅を保つて遠く南へ展開し、正面遙かに雲かとまがふ吉野連峰に至るまで、五六里の沃野が雙眸の中に入る。此の雄大な地形は、和銅元年二月の元明天皇の遷都の詔の中に、「方今平城之地、四禽叶レ圖、三山作レ鎮、龜筮並從、宜レ建二都邑一云々」(續日本紀)とある通り、海內無雙の帝都の地であつた事が誰にも肯けるのである。それと同時に、近くの都跡村の茅屋から縷々と立ち上る炊煙を見、又近く往き交ふ京都や



平城宮址

大阪行の電車の響や、遠近の村落から聞えて來る長閑な雞犬の聲を耳にする時は、福麻呂が千二百年前に、日毎に荒れ行く舊都の様を見て歌つたのとは自ら異なつた哀愁の情が、頻りに胸に湧き起るのである。

讃二久邇新京一歌一首（○原二首の中）幷短歌

一〇五〇　現つ神　吾が大君の　天の下　八島の中に　國はしも　多くあれども　里はし
明津神　吾　皇　之　天　下　八島之中爾　國者霜　多　雖　有　里者霜

も　さはにあれども　山並の　宜しき國と　川次の　立ち合ふ鄕と　山城の
澤　爾雖　有　山並之　宜　國跡　川次之　立　合　鄕跡　山代乃

鹿背山の際に　宮柱　太敷き奉り　高知らす　布當の宮は　河近み　瀬の音ぞ
鹿背山　際爾　宮　柱　太敷　奉　高知　爲　布當乃宮者　河近見　湍　音敍

清き　山近み　鳥が音響む　秋されば　山もとどろに　さ男鹿は　妻呼び響め
清　山近見　鳥賀鳴慟　秋去　者　山裳動　響爾　左男鹿者　妻呼　令響

春されば　岡邊も繁に　巖には　花咲きををり　あな何怜　布當の原　いと貴
春去　者　岡邊裳繁爾　巖　者　花開　乎呼理　痛　何怜　布當乃原　甚　貴

と　大宮處　諾しこそ　我が大君は　君の隨　聞こし給ひて　さす竹の　大宮
大宮處　諾　己曾　吾　大王者　君之隨　所　聞賜　而　刺　竹乃　大宮

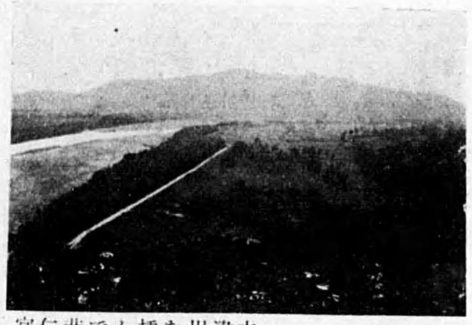
此處と　定めけらしも
此跡　定　異等霜

一〇五一　遷新京　本歌を講ずるに當つて先づ恭仁京の地形を說明して置かう。恭仁京は天平十二年十二月から同十六年二月難波に遷都せられるまで、四箇年餘の帝都であつて、京址は今の京都府相樂郡瓶原村を中心とする地域である。瓶原村と木津川を隔てて南に在る加茂町木津町邊は、古く岡田と稱した地で、夙に元明天皇の和銅元年に、岡田離宮に行幸のあつた事が續日本紀に見えて居る。先づ關西本線加茂驛に下車し、加茂町大字船屋を北へ七八町行くと木津川の岸に出る。恭仁大橋を渡り北西へ十四五町行くと、瓶原村大字例幣に達する。續日本紀天平十八年九月の條に、恭仁の大極殿を國分寺に施入すと記してある其の寺址は、今例幣に在る村役場の地で、今も其處に大きな礎石が三四箇遺つてゐる。又役場の東隣には七重塔址といふのがあつて、其處には礎石が殆ど完全に保存されてゐる。又役場の北に大字登大路といふ字がある。卽ち此の附近が古の恭仁の大宮の位置である。又當時は木津川を隔てて南の加茂町に甕原離宮があつて、天平

恭仁京址附近略圖

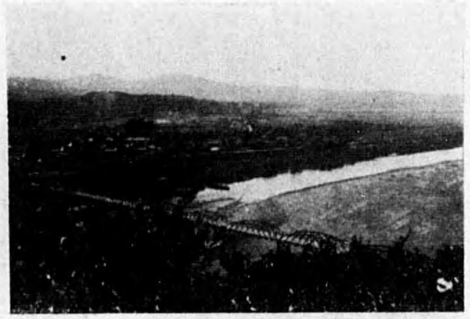
十四年八月に、宮城以南の大路の西のほとりと甕原離宮の東の間に、大橋を架した事が續日本紀に見えて居る。さて恭仁京の地域は、彼の雄大な藤原平城兩京等に較べると、遙かに狹い所である。先づ恭仁京の北には三上山一帶の連山が近く迫つて居り、木津川を隔てて西南には鹿脊山が在り、南は稍遠く春日山の北面を望み、東南には笠置山の山脈が延びてゐる。此の歌に「布當の宮」又反歌に「布當の野」とあるのは、恭仁宮の地を指したのであつて、瓶原村を一に布當野と稱したのに基づく。なほ布當川と云ふのは今の和東川で、東北から流れて來て、

恭仁大橋の少しく上流の所で木津川に合流してゐる、長さ三四里の支流である。斯様に木津川を挿んで、四面連山に圍まれた方一里程の平野が恭仁京の地であるが、喜田貞吉博士の説に據れば、京域は更に廣く、西は木津町上狛町邊までに亙つてゐたといふ事である。然し恭仁宮の造營は僅か二年で中止せられたのであるから、たとへ最初の計畫は廣大であつたにしても、十分工事を進める暇は無かつた事と思はれる。恭仁は以上述べたやうな地形であるから、帝都の地としては奈良に比して餘程遜色があるが、青山四周の地であり、而も木津川の清流が中央を流れてゐるので、景色は頗る佳いのである。殊に木津川の水利を得た事は當時遷都の一理由となつたものと思はれる。



木津川を挿んで恭仁宮

○現つ神　此の世に現に在します神で、天皇を申す。「大君は神にしませば」といふ思想に基づく。「現人神」といふのと同義である。○吾が大君の　流布本にワカスメロキノと訓んで居るが、略解にワガオホキミノと改めたのがよい。此の下に「知らしめす」といふ句が省略せられてゐる。○八島の中に　「八島」は「八洲」とも記す。「八島國」と同じで、我が國の古名。「八」は數多の意で、「八島國」は群島國の義である。記紀の神話に、諾冉二神が淡路島を始め八島を國生みし給うたのに據つて、我が國を「大八島國」と謂ふとあるのは、地名の説明説話である。○多くあれども　訓は流布本に據る。代匠記精撰本にサハニアレドモと訓んである。○山並の　山の並び即ち連山のこと。



恭仁京の四圍の山々を指す。○川次の　既出(九二三)参照。ここでは泉川(即ち木津川)や、それに注ぐ布當川(即ち和束川)白砂川などを指す。○立ち合ふ郷と　「立ち」は接頭語。「立ち合ふ」は行き會ふと同じ意。幾條もの川が合流する地であるとての意。○鹿背山の際に　「鹿背山」は木津川の南岸、加茂町と木津町の中間に在る。「際」には間・邊などの義がある。續日本紀天平十三年九月の條に「從二賀世山西道一以東爲二左京一、以西爲二右京一。」とあるから、鹿背山を界として左右兩京に分つたのである。○太敷き奉り　「太敷奉」を流布本以下諸註にフトシキタテテと訓んでゐるが、今は古義の訓に從つた。但し意味の上では、「太敷きまして」又は「太敷き立てて」とあるべき所である。○布當の宮は　「布當」を流布本にフタイと訓んで居るが、略解にフタギと訓んだのがよい。「當」をタギと訓む例には「落ち當知たる白浪に」(二一六四)の如きがある。「布當の宮」は即ち恭仁宮である。○鳥が音響む　流布本の訓にトリカネイタムとある。童蒙抄には「慟」をトヨムまたはサワグと訓み、略解には「慟」を「動」の誤としてトヨムと訓み、攷證には「慟」は「動」に通用すると言つてゐる。今は原のままをトヨムと訓んで置く。鳥の鳴聲が響き渡る。此の「とよむ」は自動詞で四段に活用するが、下の「妻呼び響め」の「とよむ」は他動詞で下二段に活用する。○山もとどろに　山が轟くほどに。○花咲きををり　(九二三)参照。○あな柯怜(おもしろ)　流布本の訓にイトアハレ、考にアナニヤシ、略解の一訓にアナアハレ、攷證にアナタヌシ、古義にアナ

オモシロと訓んである。今は古義に從つた。「柯怜」の訓に就いては〔二〕に述べた。○いと貴と　流布本にイトタカキ、略解にアナタフト、古義にイトタフトと訓んで居る。今は古義に從ふ。「たふと」は「たふとし」の語幹である。○諸しこそ　「し」は強意「こそ」は係助詞。○君の隨　略解の訓に據る。流布本の訓にキミカマニとある。大君に坐しますままにの意。「神ながら」と同じ意。○聞こし給ひて　考の訓に據る。流布本の訓にキカシタマヒテとある。景勝の地であると聞き給うて。○さす竹の　「大宮」の枕詞。（既出）

恭仁宮址より鹿背山を望む

【譯】現つ神にましますわが大君が、治め給ふ天の下なる大八島國の中には、帝都を營むべき國は多くあり、住むによい里は幾らもあるけれども、特に連山の妻の美しい國であり、幾條もの川が合流してゐる里であるといふので、此の山城國の鹿背山のほとりに、御所の御柱を太くお構へ遊ばされて（大宮を營み給うて）宮居し給うてゐる布當の宮は、河が近くを流れて居るので瀬の音が清く聞え、又山が近いので鳥の聲がよく響いて來る。秋になれば山も轟き渡るばかりに、牡鹿が妻を呼び立てて聲を響かせ、春になれば岡邊には繁く、巖のほとりに枝も撓むまでに花が咲き亂れる。あゝ景色の好い布當の原よ。何と貴い大宮處よ。さてこそ我が大君は、君に坐しますままに景勝の地であるとお聞き遊ばされて、大宮を此處とお定めになつたものと思はれる。

【評】山と河の景趣を水音と鳥の聲を中心に敍べ、春と秋の美觀を鹿の聲と花の色で代表させたのは、恭仁京の印象的描寫であり、又それを承けて「あな何怜布當の原、いと貴と大宮處」の讃美の聲に移り、最後に帝都を此所に定め給うた叡慮をたゝへて、冒頭の「現つ神吾が大君の」以下に述べた奉讃の詞と照應させてある。かくて此の長歌の構想並に表現は、極めて整然としてゐて誦するに足る作品となつて居るが、人麻呂赤人等が歌つた同類の作品の數々を見て來た眼には、類型的な感が起るのである。例へば一首の構想を始として、冒頭の十八句と終の七句の內容並に語句や、其の中間にある敍景の表現技巧などには、吉野其の他の離宮を詠んだ人麻呂赤人等の作品の模倣が認められるのである。只注意すべきは、彼の作風が明朗輕快であつて、萬葉末期の傾向の一面を最もよく代表して居る事である。

反歌二首

一〇五一　瓶の原　布當の野邊を　清みこそ　大宮處　定めけらしも
三日原　布當乃野邊　清見社　大宮處　定　異等霜

【譯】瓶の原の布當の野邊は誠にすがすがしい所であるから、此處を大宮處とお定めになつたものと思はれる。

一〇五二　山高く　河の瀨清し　百世まで　神しみ行かむ　大宮所
山高來　川乃湍清石　百世左右　神之味將往　大宮所

【釋】○山高く　流布本に「弓高來（ヤマタカク）」とあるが、「弓」は妥當でないから、考に據つて「山」に改めた。○神しみ行かむ　流布本にカミノミユカム、新解にクスシミユカムと訓んであるが、管見の訓のカミシミユカムが妥當である。「神しみ」の「しみ」に就いて攷證に「今の俗言に何めきたるといふを何じみたるといふもこれなるか。」と述べて居

る。口語の「學者じみる」「田舍じみる」などの「じみる」は、單獨の動詞としても用ゐる「じみる」(染)であつて、「じみな模樣」の「じみ」も是である。「じみる」は其の狀態に見える意を表す動詞であつて、平安朝文學に散見する「香にしむ」「身にしむ」「思ひしむ」などの「しむ」と同じである。此の「しむ」(染)は、益其の狀態になり行く意を表す接尾語の「さぶ」と、同じ意義に用ゐられるのであつて、「神しむ」は「神さぶ」(同類の例に「勝さぶ」「少女さぶ」「おきなさぶ」等がある)と同義である。從つて「神しみ行かむ」は益神々しくなり行く意である。

【譯】此處は山が高く聳え、河の瀨のすがすがしい佳い所である。此の大宮處は幾百年の後までも、いよ〳〵神々しく榮え行くであらう。

難波宮作歌一首幷短歌

一〇六二　やすみしし　吾が大君の　在り通ふ　難波の宮は　いさな取り　海片つきて
安見知之　吾大王乃　在通　名庭乃宮者　不知魚取　海片就而

玉拾ふ　濱邊を近み　朝羽振る　浪の音さわぎ　夕なぎに　櫂の音聞ゆ　あかときの
玉拾　濱邊乎近見　朝羽振　浪之聲　蹈　夕薙　丹　櫂音之聲所聆　曉

寐覺に聞けば　海若の　潮干の共　浦渚には　千鳥妻呼び　葦邊には　鶴が音響む
寐覺爾聞　者　海石之　鹽干乃共　汐滿爾波　千鳥妻呼　葦邊部爾波　鶴鳴動

見る人の　語にすれば　聞く人の　見まく欲りする　御食向ふ
視人乃　語丹爲　者　聞人之　視卷　欲　爲　御食向

味原の宮は　見れど飽かぬかも
味原宮者　雖見不飽香聞

【釋】○難波宮　恭仁宮から更に難波宮に遷都せられたのは、天平十六年二月である。續日本紀天平十六年の條に「二月甲寅、運恭仁宮高御座幷大楯於難波宮云々。庚申、左大臣宣勅云、今以難波宮定爲皇都云々。」とある。遷都の動機は、橘氏の勢力を挫く爲の藤原氏の策に出でたものであると云はれてゐる。然るに是より曩天平十四年八月、恭仁京の未だ完成に至らぬ頃、近江國信樂に紫香樂離宮の造營が起されてゐたが、難波遷都の翌年正月に、天皇は此の紫香樂宮を帝都と定め給うたのである。即ち續日本紀に據れば「十七年春正月己未朔、廢朝午遷新京、伐山開地以造宮室、垣牆未成繞以帷張云々。」と見えて居る。(紫香樂宮址は滋賀縣甲賀郡雲井村大字黃瀨に在つて今も百餘箇の礎石が整然と遺つて居る。此處は恭仁京の東北六里、大津市の東南五里に當る。)斯くて其の後僅か四箇月にして、天皇は平城京に還幸になり、平城の舊都は再び帝都となつたのである。○在り通ふ　常に往き通ふ意。(既出)從來離宮として屢行幸のあつた地であるから、かう云つたのである。○難波の宮は　下に「味原の宮」とあるのと同じ。○いさな取り　「海」の枕詞。(既出)○海片つきて　「片つく」は片附くの義で偏り附く意。他の用例を示せば「山片就て家居せる君」(一八四二)「谷可多頭伎て家居れる君が云々」(四二〇七)等がある。○玉拾ふ　流布本を始め諸註にタマヒロフと訓んでゐるが、古義にタマヒリフと訓んだのが正しい。「拾ふ」を古くは「ひりふ」と云つたのであつて、假名書の例に「玉藻比利波む」(四〇三八)「沖つ白玉比利比て行かな」(三六一四)「家づとに貝ぞ比里弖る」(四四一一)の如きがある。此の句は「濱邊」の形容詞的修飾語であ

る。○朝羽振る　朝に打ち寄せ來る意。既出(一三一)參照。○櫂の音聞ゆ　流布本に「擢合之聲」をカカヒノオトと訓んであるが、考に「合」を衍と見てカヂノトと改めたのに從ふ。○海若の　流布本に「海石之」とある。考には「石」を「原」の誤と見てウナハラノと訓み、略解の一説には「石」を「若」の誤と見てワタツミノと訓み、古義には宣長の説を引いて「海近三」の誤としてゐる。今は略解の一説に從つて置く。「わたつみ」は海のこと。(既出)○潮干の共　潮が干ると同時に。○浦渚には　流布本に「納渚爾波」とあり、略解には「納」を「汐」に改めてウラスニハと訓んで居る。今は略解の説に從ふ。海邊の洲には。○鶴が音響む　訓は古義に據る。流布本にタツカネトヨミ、元暦校本にタツナキトヨミと訓んである。○語にすれば　語り種にすれば、卽ち話に語ればの意。○見まく欲りする　流布本の訓にミマクホリシテとあるが、略解にミマクホリスルと訓み改めたのがよい。見たいと希ふ所の。○御食向ふ　「味原」の枕詞。既出(一九六)參照。○味原の宮は　「味原の宮」は夙に書紀孝德天皇の條に「白雉元年春正月辛丑朔、車駕幸二味經宮一觀二賀正禮一云々。」と見えて居る。「味原」は地名で、和名抄に「攝津國東生郡味原」とある。『大日本地名辭書』に鶴橋村の北部及び中本村(現在の大阪市東成區鶴橋北之町・東小橋町・中本町)邊に當ると云はれてゐる。一説に『攝津志』には、島下郡別府・味舌の二村(今の大阪府三島郡味舌村味舌下及び味生村別府の地)であると記してある。宮址は詳かでないが、喜田博士の『帝都』には、三島郡江口町(吹田町の東方淀川河畔に在る)の附近であらうと云はれてゐる。

【譯】我が大君が屢行幸し給ふ難波の宮は、海に片寄つてゐて玉を拾ふ濱邊が近いので、朝に打ち寄せる浪の音が騷がしく聞え、夕凪に漕ぎ行く櫂の音も聞えて來る。曉の寢覺に聞くと、海の潮が干るにつれて、浦の洲には千鳥が妻を呼び立て、葦の茂つてゐるあたりでは鶴の聲が響き渡つてゐる。此の佳い景色を見る人が話に語ると、聞く人は頻りに見たいと希ふ味原の宮は、いつまで眺めてもつひぞ飽く事がない。

【評】既に述べたやうに、此の種の歌は大體人麻呂によつて一つの型が出來たのであつて、赤人も其の形式から脫する事が出來なかつたのであり、福麻呂に至つては更に人麻呂赤人等の先輩の影響を多く受けて、創意に乏しい作品を詠んだのである。但し此の長歌は浪の響・櫂の音・千鳥の聲・鶴が音など、耳にする音によつて朝に夕に變化する海濱の景趣を、簡素な語句を用ゐて巧みに寫して居る所に特色がある。尤も情熟が缺けてゐる事は、此の作者の他の作品に於けると同樣である。

反歌二首

一〇六三　あり通ふ　難波の宮は　海近み　漁童女等が　乘れる船見ゆ
有通　難波乃宮者　海近見　漁童女等之　乘　船所見

【譯】屢行幸遊ばされる難波の宮は海が近いので、海人の少女等が乘り出してゐる船が手に取るやうに見える。

【評】長意吉麻呂が難波の離宮で詠んだ「大宮の内まで聞ゆ」(二三八)の作と比較すると、聊か平凡な感がする。

一〇六四　潮干れば　葦邊にさわぐ　あし鶴の　妻呼ぶ聲は　宮もとどろに
鹽干　者　葦邊爾　諍　白　鶴乃　妻呼　音者　宮毛動　響二

【釋】○あし鶴の　「白鶴」を流布本にアシタツと訓み、考に引く昌保の説には「百鶴」の誤と見てモモタヅと訓み、攷證には字面通りシラタヅと訓んで居る。思ふに原文の「白」は、鶴が白い鳥であるから添へたので、「白鶴」は只

鶴を指したのである。鶴を「あしたづ」と云つた例には、「湯の原に鳴く蘆多頭は」(九六一)の如きがある。「あし鶴」は和名抄の「鶴」の條に「一名多豆、今按倭俗謂レ鶴爲二葦鶴一是也。」とある通り普通の鶴を云ふ。鶴は多く葦邊に居るので、此の名を得たのである。

【譯】潮が干ると、葦原の邊で鳴き騒いで妻を呼ぶ鶴の聲が、御所の中に響き渡るほど聞えて來る。

【評】前の反歌に、作者が物珍らしく眺めた海人の生活を歌つたのに對して、此の歌に宮に響き渡る鶴の聲を歌つたのは、素材の組合せが巧みである。尤も此の二首の素材と略同一のものが、既に長歌に取扱はれてゐるから、反歌としての價値は低下せざるを得ないであらう。

過二敏馬浦一時作歌一首幷短歌

一〇六五　八千桙の　神の御世より　百船の　泊つる泊と　八島國　百船人の　定めてし
八千桙之　神之御世自　百船之　泊　停跡　八島國　百船純乃　定　而師

敏馬の浦は　朝風に　浦浪さわぎ　夕浪に　玉藻は來寄る　白沙　清き濱邊は
三犬女乃浦者　朝風爾　浦浪左和寸　夕浪爾　玉藻者來依　白沙　清濱部者

往き還り　見れども飽かず　諾しこそ　見る人毎に　語り繼ぎ　偲びけらしき
去還　雖見不飽　諾石社　見人毎爾　語嗣　偲家良思吉

百世へて　偲ばえ行かむ　清き白濱
百世歷而　所偲將往　清白濱

【釋】○敏馬浦　神戸市灘區一帶の海濱に當る。〔二五〇〕參照。○八千桙の神の御世より　八千桙の神は大國主神の別名。書紀一書に「大國主神亦名大物主神、亦號二國作大己貴命一、亦曰二葦原醜男一、亦曰二八千矛神一、亦曰二大國玉神一、亦曰二顯國玉神一。」とある。少名毗古那神と共に國作をした事が記紀の神話に見える。卷十八に「於保奈牟知須久奈比古奈の神代より」(四一〇六)とあるのと同じで、八千桙神が國作をなされた神代以來の意。○泊つる泊と　多くの船が碇泊する港として。此の句は「定めてし」に懸つて下の「敏馬の浦」を修飾してゐる。○八島國　大八島國と同じで我が國土の總名。○百船人の　原文の「百船純乃」の「純」をヒトと訓むのは純一の義に據る義訓である。〔一〇二三〕にも「百船純毛」と用ゐてある。○朝風に　此の「に」は動作の理由や原因を示す。下の「夕浪に」の「に」も同樣。「朝風に云々」「夕浪に云々」は〔一三一〕の「か青なる玉藻沖つ藻、朝羽振る風こそ寄せめ、夕羽振る浪こそ來寄れ」と同じやうに、朝夕に吹き起る風に浪が立ち、其の浪が玉藻を岸に寄せ來る意を對句形式で歌つたのである。○白沙　「沙」を元暦校本にスナコ、西本願寺本にマサコと訓んでゐるが、流布本及び諸註の訓にマナゴとあるのがよい。〔五九六〕參照。○諾しこそ　〔一〇五〇〕參照。○偲びけらしき　流布本に「偲家良思吉」とあるが「偲」は例によつてシヌブと訓むべきである。「けらしき」は上の「諾しこそ」に對する結である。「けらしき」の語法は四一頁に說明して置いた。「偲ぶ」は愛で慕ふ意。○偲ばえ行かむ　「え」は例の自然的可能の助動詞。○清き白濱　清き白沙の濱の意。〔九三八〕に是と同じ句があつて、新考にキヨミシラハマと訓んであるが、語法上妥當でない。

【譯】國作りましし八千桙神の御代以來、多くの船が泊る港として、日本國中の多くの船人が定めた敏馬の浦は、

朝風に浦浪が立ち騒ぎ、夕浪に美しい藻が寄つて來る。白沙の清い濱邊は、往きつ戻りつして見ても見飽くことがない。此の景色を見る人毎に次々に語り傳へて、愛で慕ひ來つたのも尤もである。此の清き白沙の濱は百代を經て、人々に慕はれ行くであらう。

【評】此の作は、赤人が印南の藤井の浦を歌つた長歌〔九三八〕の影響を多く受けて居るやうである。結尾句の「清き白濱」の如きも、赤人のかの作に倣つたのであらう。此の歌の技巧として注意すべきは、「百船」と「百船人」、「白沙清き濱邊」と「清き白濱」、「見れども飽かず」と「見る人毎に」、「偲びけらしき」と「偲ばえ行かむ」のやうに、語句の反復の多い事であつて、此の點は高橋蟲麻呂の表現技巧と相似てゐる。敍景は平板で敏馬の浦の特色を捉へてゐないが、時間的に變らぬ繁榮を歌つてゐるのと、全體に清爽な氣分を漂はしてゐるのは、例によつて此の作者得意の手法である。

反歌二首

一〇六六　まそ鏡　敏馬の浦は　百船の　過ぎて往くべき　濱ならなくに
眞十鏡　見宿女乃浦者　百船　過而可往　濱有七國

【釋】○まそ鏡　眞澄鏡の意。鏡は見るものであるから「敏馬」のミの音に懸けて枕詞とした。〔五七二〕參照。○過ぎて往くべき　泊らずに行き過ぐべきの意。○濱ならなくに　濱ではない事よの意。

【譯】敏馬の浦は幾多の船が立ち寄らずに、通り過ぎられる濱邊ではない。

【評】長歌の冒頭の八句と同じ内容を、短歌形式に歌つたまでである。

一〇六七　濱清み　浦うるはしみ　神代より　千船のとまる　大和田の濱
濱清　浦愛　見　神世自　千船　湊　大和太乃濱

右十二首（○原二十一首）田邊福麻呂之歌集中出也。

【釋】○浦うるはしみ　原文の「愛見」を流布本にナツカシミと訓んでゐるが、童蒙抄にウツクシミ、考にメツラシミ、略解にウルハシミ（攷證・古義・新考・新訓・全釋同訓）と訓んでゐる。最後の訓に從つた。○千船のとまる　「湊」を流布本にトマル（童蒙抄・新訓・全釋同訓）と訓み、代匠記精撰本にツドフ（攷證之に從ふ）、考にハツル（略解・古義・新考同訓）と訓んである。「湊」には「つどふ」の義があるが、長歌に「泊停跡（ハツトマリト）」とあるから姑く流布本の訓に據る。○大和田の濱　今の神戸市西區の沿海に當る。和田岬に其の名が遺つてゐる。

【譯】濱邊が清いから又浦が懐かしいから、神代この方多くの船が泊る大和田の濱のよさ。

【評】これも長歌の冒頭を承けて、敏馬の浦に續く大和田の浦を讃へたのである。初句の「濱清み」を承けて「大和田の濱」で結び、なほ第二句にも「浦」を出したのは、長歌に於けると同じ反復法である。

萬葉特殊假名遣表

凡例

上代特殊假名遣の事は二七四頁に大要を述べて置いた。左に掲げる表は『日本文學大辭典』第三卷所載の「萬葉假名表」の中から、特殊假名遣に關するもののみを抄出したのである。

同類の假名は音假名を前に、訓假名を後にし、其の境界を」によつて示し、濁音の假名には右側に、を附けて置いた。

二字を以て一音を表すものや、異體字は省略する事にした。

み	甲類	美彌瀰弭寐湄民」三[illegible]
	乙類	微未味尾」箕實身
め	甲類	賣咩謎綿面馬」女
	乙類	米毎梅璹妹昧晩」目眼
よ	甲類	用庸遙容欲」夜
	乙類	余與豫餘譽預已」四世代吉
ろ	甲類	漏路露婁樓魯盧
	乙類	呂侶閭慮廬稜勒里

萬葉特殊假名遣表

凡例

上代特殊假名遣の事は二七四頁に大要を述べて置いた。左に掲げる表は『日本文學大辭典』第三卷所載の「萬葉假名表」の中から、特殊假名遣に關するもののみを抄出したのである。

同類の假名は音假名を前に、訓假名を後にし、其の境界を「によつて示し、濁音の假名には右側に、を附けて置いた。

二字を以て一音を表すものや異體字は省略する事にした。

え

ア行　愛哀埃衣依『榎荏得

ヤ行　延曳容叡盈要緣喬『兒柄枝吉江

き

甲類　支岐伎妓吉棄弃枳企耆祇祁『寸杵服來　藝、岐、伎、儀、蟻、祇、嵜、

乙類　己紀記忌歸幾機基奇綺騎寄氣既貴癸『木城樹　疑、擬、義、宜、

け

甲類　祁計稽家奚鷄雞谿溪啓賈價結『異　牙、雅、下、夏、霓、

乙類　氣開既概穊慨該階戒凱愷居擧希『毛食飼消筍　宜、義、皚、碍、礙、偈、削、

こ

甲類　古故胡姑祜枯固高庫顧孤『子兒小粉籠　胡、吳、誤、虞、五、吾、悟、後、

乙類　許己巨渠去居虛擧據莒與『木　碁、其、期、語、馭、御、

そ

甲類　蘇宗素泝祖巷嗽『十麻磯　俗、

乙類　曾層贈增僧憎則賊所諸『其衣襲薺彼苑　叙、存、鱒、鋤、序、茹、

と

甲類　刀斗土杜度渡妬覩徒塗都圖屠『外砥礪戸聰利速門　度、奴、怒、渡、

乙類　止等登鄧騰滕臺苫澄得『迹跡鳥十與常飛　杼、縢、藤、迺、耐、特、

ぬ

甲類　怒努弩

乙類　奴農濃『沼渟渚寐犬去

ひ

甲類　比毘卑辟避譬臂必賓嬪『日氷檜負飯　毘、毗、妣、弭、寐、鼻、彌、婢、

乙類　非斐悲肥彼被飛秘『火乾籤樋　備、眉、媚、縻、傍、

へ

甲類　幣弊獘蔽敝平鞞覇陛反返『遍『部隔方重邊畔家　辨、聲、謎、便、別、

乙類　閇閉倍陪杯珮俳沛『綜瓮缶甕瓲經戸　倍、毎、

み

甲類　美彌彌彌彌彌『三參御見視眷水

乙類　微未味尾『箕實身

め

甲類　賣咩謎綿面馬『女

乙類　米每梅琦妹昧晩『目眼

よ

甲類　用庸遙容欲『夜

乙類　余與豫餘譽預已『四世代吉

ろ

甲類　漏路露婁樓魯盧

乙類　呂侶閭慮廬稜勒里

昭和十年六月六日印刷
昭和十年六月十一日發行

改修 萬葉集新講 上卷

◇◇◇◇◇◇◇
◇　　◇
◇ 複　不 ◇
◇ 製　許 ◇
◇　　◇
◇◇◇◇◇◇◇

定價金五圓

著作者　東京市豐島區池袋三丁目一五三九番地　次田潤

發行者　東京市日本橋區通三丁目一番地　河出靜一郎

印刷者　東京市神田區錦町三丁目一一番地　白井赫太郎

印刷所　東京市神田區錦町三丁目一一番地　精興社

發行所　東京市日本橋區通三丁目一番地
（振替口座東京一七一九番）
成美堂書店
電話日本橋(24)二七七七

911.123
Ts 391

終